シンポジウム
「映像としてのアジア――アントニオーニの『中国』」について

鈴木　健郎

本月報に所載の論文は、専修大学社会科学研究所特別研究助成共同研究「フランスと東アジア諸地域における近現代学芸の共同主観性に関する研究」（平成 21 年度～23 年度。代表：鈴木健郎）における研究の一環として、2011 年 12 月 10 日に専修大学神田校舎でおこなったシンポジウム「映像としてのアジア――アントニオーニの『中国』」で発表された内容を増補したものである。

本共同研究は、フランスをはじめとする西洋諸国と中国・日本・韓国などの東アジア諸地域の文化的な相互関係を、近現代における三つ以上の地域の複雑な情報・イメージ・人間（学術研究・書籍・翻訳・映画・留学）などの複雑な相互還流の様相に着目して解明しようとするものである。例えば「フランス人研究者の中国人イメージ」「日本人研究者の中国イメージ」「フランスや日本人の中国研究の知識を通過した上での中国人研究者の中国イメージ」などの形成を動態的な様相から解明しようとつとめてきた。それに関連して、フランス東洋学における中国・日本・カンボジア・ベトナムなどの研究活動や文物収集についての問題、西洋文学の中国語や韓国語への翻訳の問題、フランスの文学者や外交官の中国や日本における活動、文化大革命をフランス人女性が撮影した記録写真集の出版と展覧会などについて、これまで多くの研究集会や討論会や現地調査をおこなっており、現在その成果をまとめつつある。

以上のような研究活動の一環として、ミケランジェロ・アントニオーニのドキュメンタリー『中国』に関する諸問題を検討する上記のシンポジウムをおこない、本月報はそれにもとづく論文を特集している。

ミケランジェロ・アントニオーニ［Michelangelo Antonioni、1912～2007］は、劇映画『夜』［La notte、1961］、『太陽は一人ぼっち』［L’eclisse、1962］、『赤い砂漠』［Il deserto rosso、1964］、『欲望』［Blow-up、1966］、『愛のめぐりあい』［Al di là delle nuvole、1995］などの作品で世界的に著名な映画監督である。そのアントニオーニが 1972 年に文化大革命中の中国を撮影した『中国』［Chung Kuo Cina］は、中国の政治状況の変化に翻弄されて、中国国内で激しい批判を受け、これを受けてヨーロッパでは激しい論争を引き起こしたが、日本では公開されなかった。こうした一連のプロセスに含まれる多様な問題やそのダイナミズム、問題点について、当日のシンポジウム会場では、この映画を実際に上映して（この上映のためにシンポジウム専用の字幕を作成した）、その画面やナレーションの内容を仔細に観察しながら、なぜ日本でこの映画が上映

されず問題にもされなかったのかという問題提起も含めて、研究発表と討論がおこなわれた。当日の研究発表の題目は以下の通りである（敬称略）。

劉文兵（早稲田大学）「『中国』にみる文革時代の集団的身体」

楊弋枢（南京大学）「「眼差し」への「眼差し」－『中国』をみる者の屈折的な言説」

下澤和義（専修大学）「あるドキュメンタリーの存在証明―欧米批評家たちによる『中国』」

このほかに、印紅標（北京大学）「歴史再訪――アントニオーニの『中国』を見る」と新田順一（北京大学国際関係学院修士課程学生）「中国における『中国』―「帽子をかぶせる」から「帽子をはずす」までー」が書面参加した。

本月報では、上記のシンポジウム発表に基づく論文に加えて、Laura De Giorgi（Department of Asian and Northern African Studies, Ca’Foscari University, Italy）への依頼原稿「アントニオーニの『中国』をめぐるイタリアでの論争―美学・政治・イデオロギー」および土屋昌明（専修大学）の論文「日本人から見た『中国』」が増補されている。

本月報の研究成果は、上述の共同研究の方法と問題意識に基づき、西欧と中国と日本という三つの地域間の往還を明確に意識し、また表象文化研究と現代史研究を具体的に融合したものとなっている点で、従来の当該分野の研究とは異なる新しい視点を打ち出すものと考えている。大方の御叱正を賜れば幸いである。

最後になるが、本シンポジウムで通訳を担当して下さった小川都氏（専修大学非常勤講師）、日本語字幕とイタリア語ナレーションの照合をして下さったイラリア・シニョリーニ飯田氏をはじめ、ご協力下さった各位にこの場を借りて感謝を表したい。